Q27 保護者の思いと相違があったり、家庭での取り組みに消極的だったりする保護者との連携が難しいです。

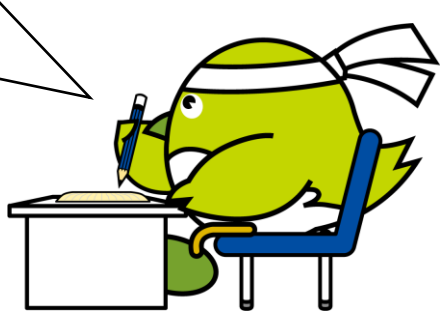
Ａ「傾聴・共感・受容」の姿勢を基本に、保護者一人一人に応じた連携の在り方を探り、粘り強く取り組みます。

保護者の状況や考え方は様々です。加えて、我が子に障がいがあることを受け入れ、前向きな姿勢に至っている保護者もいれば、まだ、その過程にいる保護者もいます。特に、学習障がいや注意欠陥多動性障がいは、小学校入学後に診断を受ける場合も多く、障がいの告知を受けて、間もない保護者もいます。

保護者が障がいを受け入れ、前向きな姿勢になるには、相当の時間を要し、個人差が大きいことが明らかになっています。保護者の支援に当たることも、特別支援学級や通級指導教室担当の役割の一つですし、保護者一人一人に応じた連携が求められているといえます。

「傾聴・共感・受容」の姿勢を基本に、保護者の思いに寄り添い、粘り強く聞いたり、話したりすることが大切です。学校の取組に協力してもらえなくても、成長の様子を伝えたり、授業参観で支援の状況などを見てもらったりして、成長を感じてもらい、連携しようとする姿勢を持ち続けましょう。

卒業後の進路は難しい課題です。成人後の生活のイメージや、進学先の学校の情報を積極的に提供することも一つの方法でしょう。一方的に学校の考えを伝えるのではなく、時間をかけて話をすることが大切です。

なお、通級指導教室において、高校受験のための指導は、保護者の希望であってもできません。通級による指導の説明をして、理解を求めましょう。

教師と保護者の関係だけでなく、特別支援学級や通級指導教室の保護者同士の関係が深まると、学校とよりよい連携が図られることがあります。学級懇談の持ち方を工夫してみましょう。